



日本絵類考

七

10
75
11



日本位類考卷七

目錄

友禪條

括込彩色画

位幟

一覽圖

建築位圖

名所國會

曲画

あがきだ

漆物位

刺子半纏位

地圖

切位圖

見取圖

目付位

砂画

石版画



興^一由^一の^一説の如^一古^一禪の法師の
ハ麻^一の^一單^一紙^一の^一衣^一の^一上
位^一の^一衣^一の^一上
法^一て^一古^一禪^一の^一衣^一の^一上
一^一天^一和^一夏^一の^一衣^一の^一上
高^一華^一の^一衣^一

足^一薪^一の^一衣^一の^一上
物^一の^一衣^一の^一上
一^一天^一和^一夏^一の^一衣^一の^一上
高^一華^一の^一衣^一

か^一そ^一の^一衣^一の^一上
一^一天^一和^一夏^一の^一衣^一の^一上
高^一華^一の^一衣^一

大^一日^一本^一人^一名^一辭^一書^一に^一古^一禪^一の^一衣^一の^一上
一^一天^一和^一夏^一の^一衣^一の^一上
高^一華^一の^一衣^一

——佐具の語、こゝに——画法の外、小童童と得
云々
俗耳鼓吹、友禪深々、り、あ、友泉、ハ、佐師、な、ま、
、と、う、重、く、所、と、家、と、て、深、め、く、く、在、墨、画、う、て、
わ、き、た、う、も、あ、ま、友、禪、ハ、祇、園、所、ハ、位、と、と、治、涼、ハ、
世、華、族、ハ、又、く、た、ま、梅、ハ、貞、高、板、友、禪、ハ、な、く、く、(四
巻)の、序、ハ、空、崎、氏、友、禪、ハ、り、く、く、あ、ま、り、佐、小、巧、と、
ち、く、く、く、く、い、わ、く、く、く、く、古、凡、の、い、や、く、く、く、く、
と、ね、く、く、く、と、様、の、香、車、か、く、物、教、等、ハ、く、な、ひ、と、
あ、ま、

工藝達芳、小深、ハ、友禪、若、從、方、指、あり、と、嘉、曆、二、年、
三月、同、板、粧、の、事、ハ、類、々、板、女、の、歌、集、ハ、梅、屋、及、
口、佐、ハ、祇、園、南、門、外、等、の、圖、と、掲、げ、奉、読、ハ、法、湯、の、
大、和、佐、師、友、禪、圖、画、之、と、あり、世、間、稀、ハ、友、禪、の、画、
圖、あり、と、云、其、外、没、年、序、詳、々、あり、
東京、日、々、新聞、ハ、友、禪、ハ、佐、横、橋、ハ、貞、高、之、孫、正、徳、
享、保、の、以、禪、さ、り、く、く、い、く、者、く、く、の、好、く、ハ、叶、
ひ、て、殊、々、和、派、ハ、く、く、く、く、の、と、く、ハ、男、女、大、盤、(貞、
高)研、部、ハ、夕、深、く、く、く、く、(い、り、く、く、い、や、く、く、風、
儀、ハ、一、人、と、ち、く、く、目、ハ、正、序、と、さ、せ、り、餅、ハ、従、の、深、

出—浴衣は新がら—千筋山つ—曙—まな襟
の裾の裾うき白袴の杜若つら—の袴振好と
あり又星候の古裾と草蓑なり物好きの一つと
よくて好色草男(元禄)大名の妾見、所—(お徳も
目見えとてやとよひ肌の小をみしとて—白袴
振小浅黄ぬめの着先—帯の添き—古裾の星
候の虫つ—定紋の抱枕印の裏とひきぬ様
小三寸わらわぬ—着—(又好色敷毒散
(元禄)右衛門社、若大を小振てお目見えの所—
てと着小ぬ—着、白き袖小村雀夕暮母と古裾

、星候の帯—物好—ま—丸流友—味係(享保)
ハ(上ハ老琳梅小雲鳥世らのこ裾—ハ雨小ませ
垣の古裾—あら老琳の裾—ハ古裾の菊
名譽の礼も取るとりぬ—帯の貞享文襟のもの
ハ(帯—享保—ま—深—ハ—こ—
てけの法師、生日ハ帯—た—もの死後ハ帯
て深—ハ—と—

漆物絵

大徳園誓古帳序に其旨叙くは是れも一画士と
目前よきそと大海をわぬのゆふたきききき
い道ふきききて賢ききききききききききき
能の筆工もきききききききききききききき
このの絵本帳奥方面両中やききききききき
いいあききききききききききききききき
具極極ききききききききききききききき
たききききききききききききききききき

法苑漆物絵師

井村勝去

そのちよそのわくおーろい 湯の湯物のを立
ふさいーきよま？加へてー

黒

くろまのあつらひの湯の湯煙、ま
湯物の上まのいんがくあつらひ湯煙、
おまがらまを又あいらくもあつらひ
湯物の湯の具つらひ様つらひあつらひ
つらひまの湯の湯の湯の湯の湯の湯
つらひまの湯の湯の湯の湯の湯の湯
あつらひの湯の湯の湯の湯の湯の湯
巧者のつらひ湯の湯の湯の湯の湯の湯

くろまの湯の湯の湯の湯の湯の湯

摺込模倣

摺込模倣ハ諸の画様と切替きたる模倣と以
て留めよの本條の上よとき顔料とまてらるゝ其
画様と所いひきちる 現今行りし 印華布様と
即ちこの模倣と司わたりし 古に家服と略日

刺子半纏法

刺子半纏魚ハ即刺子半纏の模様更なり刺子半纏ハ諸大丈又ハ木上泥工なり其丈非常の深小用なり半纏小一其模様ハ多クハ其者結ハ一頓精巧なりとのあり然川家の玉工團磨是也此の模様小長と一説ハ刺子半纏の模様ハ小細まゝ其の結なりと
按小房伝海岸の漢文是も所の上衣小日の出ニ括又ハ百弔武者等の模様と出出ハ大なる定紋とつけたりありこと且亦一種の模様なり

さし子ま鐘の信と略り

信帳

嬉遊笑覧上 信帳 嬉遊 五月帳門中より立案内へ
き紙のわき 正村 其の外紙のわきとつり白き
寛永ころの 端年のわきとて紙にてあまし
羅山文集 安永 五月端年云々 家へ 梓蒲造
粽且為童児立紙 惜木曾より 一代女五所の交の
わたり 紙とつきて 素人信とたのしむと云く 五元集
松達 ちよ竹の 末葉のくして 紙のわきとて 今と 田舎
よハ ちよ竹の ちよ竹 又五元集 卯月十七日あり
人の 書よと 紙とて 中さるて 郭公のわきとて 名よ

とくは先々世とつたあはれ竹の頭下うまふ
ては行のしつちや武者佐の板とて蘇枏黄汁
等ふて新とて江戸とて鐘櫃のりて紙とて
ちねとあはれとてけの頭いさうなまじや
板行の佐とて佐へたる奥村文角なりて聖佐
の鐘櫃と板とて持とて目玉小金箔おきたる
ちとあはれ一後山井佐とて巾目とて巾の如
の如とて凡諸形まゝ色と味とて小手あはれ
の如とて

重巻に編年の日小思の旗と旗と門戸ふたつ

と中この糸と漆の部いれし描くことと
佐と板と先つ漆板板竹とてちと持の漆墨とて
うきとてとて用ひとてまのて決墨曲とて

按に五月帳ハ五月節句男児を祝するの古例
してけりてちとて先仁天皇のとき赤とて退治
たまりし五月五日なまじの其の因ふこと
とて二本の帳ふ其の家は佐とて紙とて武者
佐即神田室右武内前孫金太郎山姥とてとて
中の長角とて一本の帳ふハ鐘櫃とてとてこと
とてとて今評つたはちとて考毛の鏡とてとて曹草

蒲刀を以て法へて習得あり、或は法家〜主眼の
傍ら〜の書流の希なり〜かかすつけたるあり
こととを〜とわたり〜又所家〜かかす
〜ころをけしハ形とよ〜て彦助ありさる
〜ことと内飾を〜又飾を〜と取ること
と吹き流〜と極〜た〜筆致よあけて室中よ
ひ〜〜〜輕の吹き流〜と稱〜天保嘉永の
〜はま〜の流〜き〜ひ〜のり〜吹き流〜を
つ〜〜のち〜明流あり〜ハけの例止
〜とれ〜田舎〜今なと往〜希〜

ま〜ハ内飾を〜のり〜を〜輕の吹き
〜〜大上政業〜行り〜と〜製造〜輸出
〜〜

地圖

大川氏曰く創りて日本全國の地圖を作すハ
 今と距りて千四百四十年 聖武天皇十年に於て
 天下の諸國を令一國郡國とすハ云々と出
 たり 或いは信行量全國圖を作すと其の國名
 并其の郡名凡そ七信と云々
 是より先き七十餘年 天智天皇五年 丙寅の冬 信
 純田指南車と稱す 其の云々ハ 既ハ天平の初
 ハ 方位よりして土地の廣袤と測る云々
 一 其後又國郡圖を製す云々 但
 一 地方の地圖を作す云々のハ 云々
 心産

按ニ好古小録ニ延暦二十四年改定ノ奥寛治ニ
北条製本之位誌之著述トス一タモ
年之即ニ信長ノ作トシテ一統法全國ノ國其ノ他
長祿年間ノ江戸信長等トシテ考述ハ新礼
ノ世亦地圖ノ製法ヨリハ後徳川氏ニ至
テ正保元年日本國邦至諸城回トナリ一且里
法ト定メ里標ト云キ名山古川津波等ト同邦ト
シタルモ正保法國ニ後十餘年之祿十年全國
國重修ノ命ありて日十五年小切ト考ト一ト祿元
國是尙村地圖ト作ノの法適如ク一考ハ一
リガ享保四年小切ト建邦賢弘トリク一測量ノ

命ト奉一山岳ノ絶頂ト望視一其ノ徑多ト定
メ以テ經國圖ト製ト曰國々六寸ト以テ一里小
作一ト一縮ミテ一尺一厘ト存ク一ト以テ測量
ノ術漸用キ一タリ一為トリまた其術ノ由リテ
其ノ所ト詳クシテ世以テ立異地規矩分等集ト
題トシ一書ト作ク一享保七年ノ板刻トシテ考
首ニ細井廣澤自撰ノ存アリ文中小余女好筆書
劍之暇得測量驗地等之諸規矩分方圓等諸尺而
喜焉其原出於魏徵万里之西而至於紅毛國其於
我長崎ト々鎮在諸朝而吾國傳之云爾先生其

山系已舉其個領而教余焉先兄之友金氏兄弟者
張研究之全史之全氏而遂聞其詳内而不出者四
十年矣近來偶得窺其源原本句股法義測量法義
等之旨竊探其蹟而信喜焉方々々々此小
考之考之天和年間和蘭人々々々測量の術と
傳へて發明之寛政年間伊能勘解由江海と英
測一文化元年地圖と製一幕府小奉。江海実測
地圖こと今之佐の地圖と製之者皆この圖と
接す

一覽圖

一覽圖ハ土地の方位経緯の度数小物々々山
川村市名所回廊等々々一紙の中小編々々
きたる地圖と一々々師の々々山々山々花法
一覽圖と製之け圖々々斬り之々々鋸形意高こ
之々々做い江戸一覽圖と更々々々々を驚々々
こと江戸八百八所と一紙の中小編々々々々
々々々々葛飾北高竊々々々々々々々々々々々
至上位下位の五圖と一紙小編圖一々々房総一覽
圖と名づけ刊行々々々々又其の工妙意高の上

小出〜小出〜

切込券

切込国ハ大佐券と切込券をのちれハソト大
佐券ハ携帶不便ナルノミナリ室内ノ使キ
所ニテ被用スルハ亦不便ナルハ切込券ト一簡
便ナルヲナクテ板行ノ切込券ハ天保年間ノ
板江戸ノ切込国蓋一其様ナリ〜ハカ地球
國と五大洲ハ切込板行と〜亦地球ノ切込
券ナリ

建築位置

建築位置ハ家屋建築の位置として以て位置を固
く専門家の一技として之を製する事秘し
徳川氏の母宮殿の建築は南に才つた位置に才
二小様り方才なる大工方世の之方相議して然
る後ハ建築小工も之と例して位置才最杆要
なりして格も才大工方の上ハ位ハ頗勢力と有と
る中位置ハ固く古例古式ありて位置方位及
降昇の便否等と謀り頗り秘しとて又秘し位置
と格ハ室内の壁天井等細く細く人々示さるん

有下紙より折るうきね 恰も幣を置の如く 赤根
降ふうきも 報一たて、又もあて

見取圖

見取圖の實地を一定し 其のまじは 目と等し
了し、地圖をとり、昔村川の傍に
土地境界の記すの村、ハ 昔肝要の一
し、安度度量 見取圖、長と、赤永七年天
龍川の傍に、記す、吏員小雇りと、見取圖と製
し、し、し、其村のり、記、今、余、ち、あ、り、

石新國會

石新國會ハ新國地誌書の一部ナリ其地ノ形
勢沿革凡俗物産等細クシテ記述シテ一ニ要圖
ト加ヘテ其ノ詳々也人ノ裨益ナリト云ク
都石新國會大和石新國會和泉石新國會根津石
新國會ノ四部ハ竹原若菜高ノ邊ニ在リ河内石
新國會ハ丹波桃溪播州石新國會ハ中井並江ノ
邊ニ在リ東海石新國會ハ竹原若菜高紀州石新會
會本曾根石新國會ハ西村中和伊勢志賀石新
國會ハ葦原月守天保ノ比石新國會大ナリ行ハ

且一とて最島住吉等の名不為守わすい唐土
名并為守わす傳く出板とて中々物さ江戸名所
為守最精確わすて考数亦多し一画ハ長谷川雪且
の筆也

目付法

嬉遊笑覧目付法ハ諸君大鑑二目付法合
くつゝ多あり又伽羅女と云草子宝永七
年板小島系
汁條京匠の雲井とて麻意なりと器量亦哉世後
の障小氣とつけ右史目付と云たこ入と社
出―奉書一枚小大板の右史二十六人と致ゆ小
伝とことと一句人小目とつけせ世世の方と
其の目付字とありは其の如付とありと世の
致いとととありと研其字を切へた
こ入小伝とて新製ありと紋とまも其法と

何一幼物の草子小出つて又西土小覆射つて
八卦と布きてあつ物と云ふこと漢東方朔と
昭々として魏の管輅唐の袁孝師趙丁文果等に見
とよむことつて李邦才の晴取古明在健ふと
こか真術小委しつて

物之本他者部類小目付佐ハ宝曆昭和の同派也
一丁年古板針板と小括出さるる何
と一巻の紙五張也

今ハ昔々物語の巻代に述小昔ハ目付佐といひ
今ハ暗算高物と云ふの事とありいとやうと

赤本表紙なりていつとも五丁と一冊小結
たこのやうおもしろ中そつたりの重くは
一個小目印といふ事とて一丁と云ふは
うつてハ中ふあつたきくと同てあつと
いへとも其所小結とて教ふと認とて總教と
うつて何とて指と認とて最盛小折とれ
たのハ宝曆の昭和といふ時代とあつませう古
き信ふふらやうか國々こつてま
吾妻信中江戸世のうまわつてとあつて或人の
本春信ふてあつてといひまゝ女児の髪

音の二あをいしはまのハカ...
あまきん...
昔ハむ...
今ハいまであらうと云ひま

曲画

浮世画類考葛飾北斎の條小常、曲画と善くは
注ニ玉子徳利等して蓋杖小筆と付て画と云
そ大筆も妙なり下と云ふへ書上。道画と云け
そ中うと凡へ筆と云くして画ハ筆にて画き
た、如くそくして妙なり画く所を又きれハ其
をと幻々べう...又往年は体先上質の善大筆
あり、飯小刷もよく藍と云く引き筋の善き小筆
と云け藍の上所く小印と云く龍田川の字も小
は能くと中上ハ...
...山橋の字

拙小古来曲画と云ふことの蓋一妙くして古法眼
之信書紙と云ふ事と云く画きたる一とて文化
年間之編より一人あり彫刻と云く一傍任まを
ち一最精と云く一巧之書紙と云く一精の全
舞と画と云く一筆の画と筆より一画く一墨小
一とて一様の毛より一とあり一其妙一様の画と
今程一様と云く一編の曲画既小奇なり一と更
小又奇なり一との所を一松川國芳の活版と云く一大
画と画と云く一と云く一と云く一と云く一と云く一
筆と云く一と云く一と云く一と云く一と云く一と云く一

画く一とのあり又拙小洞天清録小来南玄為墨就
或以一紙筋或以一蕨滓或以一蓮房佩文高書画譜小疎
白湯以一紙蕪墨作一雲山是依旭以髮作書之類余嘗
嘗飾其奇の極作と云く一画きたる一山水と云く一と云く一
毛筆画と云く一と云く一頗雅致ありと云く一

砂佐

砂佐ハ向砂と云ふ一深めことと云ふ小振り北上
小人物花多りし事と云ふ其振り洋なりと云ふ
蓋し古くも云ふたことなりし一確佐
川ありこれと云ふ女ハ盆重なりと云ふ妙なり
人嘉永安政のころ砂佐と云ふ事ハ金河を渡
州地内まじり上野廣中橋なりと云ふ一北上小
長者佐かといふ大黒市袋方と云ふ銀と云ふ其の
技頗る妙なりと云ふ其の堵のこと一又一金河を
右岸の産きたりといふ事砂と振ると云ふ類果実なり

按に砂佐の一の美術なるとされし常の人か
こまと善くし者ありて開くさしやそふ
て食とまふとの言ひし世の技とせり是れ
一任重業徳二十八日月園芳年の一法と擧げて
京師の人横山華山の壯年生計ふ善く北野天神
社内ふれり砂佐と云ふ權小報とふさる同山
直筆こまとえて大に其画才と書し我亦ふ仲い
得て重法と教授とつづい非く華山の又と
名と推譽しついで狩師家の重法とよみたる華山
知りて岸野に礼し画法と學ひ又月溪の風と慕

ふ其又就ふ重ふく華山行を乞食とすの程也
らん中且華山天保十年に没し年五十四円
山直筆寛政七年に没し年六十三とすこれ
ハ應挙の没し時華山ハ十歳なり十歳の子を
乞食とす砂佐と云ふもつゝ是れ又十歳
の子をよめて應挙の門人とすこま本是れ
芳年何ふ極きて切らまを言ひ出たるは甚
極む

あづき出し紙

あづき出し紙ハ白紙と云ふあづき出し紙と云ふと
その類と云ふ

紙遊覧小物理小儀小誓書白字と云ふて良誓
水字入五倍子水中塩滷字紙烘以大豆麻子油
寫撒紙灰或在仁灰俱不見又曰白菱研汁入礦灰
藤礦灰書黃竹紙俱如丹こと今めあづき出しと
りしものやと云ふてそのハ酒と云ふ物と云
き大よあづき出し紙の方と云ふも簡易なり

石灰魚

石灰魚ハ一斗泥銀五泥銀とて石灰とぬき魚
 くとり其の船洋りしれとも蓋一古くも
 あてた。枝や〜泥銀工伊豆の長八といひ
 者あり最この枝よ長とて〜社寺の門扉及び
 壁も重きま〜花鳥や〜と額面小重きたも
 祖師堂の麻の風神雷鼓末の人大小こまと珍美
 神ハ其の重く〜
 一高價と出〜こまを購一長八ハ六七年希小
 取〜たり門人其の重法と付〜今善く重く者
 あり〜
 去年神田五物市場の指針糸小指〜の
 石灰魚とりま〜とた〜こま蓋一

長八の門人の。又村哉徳州といふ。人ありて
長八の門人と云く其嘗人物ありし名存圖と云き
州之園におきて諸人ありて。あきき世
の人亦六七年前に殺せしといふ
長八の姓をのびて。伊豆國加茂郡相崎の人
なり。又ハ名を兵助と叫ひ母にてごとく。其ハ
勤勉なり。農業亦あり。一男一女とあり。男ハ即長
ハ云。文化九年七月生。初て。饅頭と云ふ
人と。歌と。年十八。團仁助の才ありて。嘗相崎
泉寺に壁に種々の佳画と云ふ。人々賞む。餘

暇或ハ雛と作。或ハ風信と云く。其の製法とて
巧妙なり。年十九。天保江戸におきて。左官の棟梁孫
右郎の才ありて。其ハ。其業と勤り侍将
新家の重信と學い。乾道と云く。後画と云く。川越
ハ村ノ母。茅場町。茶師。堂達立の事あり。大柴多き
所。其ハ土泥と云く。因テ。堂宇と云く。其ハ。に
去りて。其の塗々と。右官の棟梁。源と云く。小松
一壁あり。柱の裝飾。画ハ。伊豆の長八ハ。托。其
と。かりた。其。源と云く。其ハ。人。と。川越。ハ。其。長八と
相く。長八ハ。江戸。源と云く。其ハ。訪。ハ。偶。あり。其

と即門下の肝煎果小面と果君八の枝と起い先
龍の下彫と重らせしむが細筆なりとしてことと
かけ更なる花紋の下重と重らせたるが保左し
て亦こととかけ保左らのゆき果とを待て長八
の其器ふあふさうと後し保左ら即長八と招き
龍の仕上けの圖と重しむし頗る精巧なり
しむがたふことと書し回しし其の音と以てそ
るて曰く龍はほせなり故し其下重ハ細筆なり
さし其形としてたふしむの根あは花紋
ハ沈塗なり故しとこれハ其形とあはし

むの根あはしと保左と深し其の音ハ感し終し
壁かうし程の裝飾塗と囀柱とを長八ハ壁柱
華ふ種々の紋と泥塗ととして即門の書と
ちし又花瓶掛類華ふ花卉鳥款の形と塗る由人
以て佐妙の技とすし晩年佐書し志し俳諧と修
め天祐と号し明治市二年十月八日東京市深川ハ
谷川所の高林下段と年七十八物産人

石刻画

重家小言 耳作元二 晋汉之際墟墓石室中刻画同
见史册 惟著 李翁有政绩因画其事刻石而立其地
是为重碑 如 洪适頌续载邢山郑方夫冢上有石
室制作工巧其内镌人物车马似是後漢诗人所为
又水经注载成汤有仲又墓者得其室画像又東漢
时物也又范史赵岐传所載壽藏圖為石刻也其後
王摩诘竹最著
工屢志料、享保年同诸國の石工好々々石と鑿
了墓碑材と云々一紙石と云々石面と琢磨し而

て後文字及物象を刻するところを存と云く又安
永年間^中是くは後江戸及諸國の石工石工上ノ文
字或ハ華章と彫刻するところ亦ハ進歩する
故ニ信鳥と石碑ハ彫刻するところハ蓋一文化文
政の始なり了一寺島の蓮華より鉄形意
高々涅槃園口所百花園より大座侍佛の画竹
の碑なりと云く是を去りて併像を彫刻するま
ハ古也

彫刻下画

彫刻下画ハ其彫刻する所の物品の形状なりそ
て画幅と楕圓位置と定りしものなるハ其
画々甚細一葛飾此高善一彫刻の下画と描く金
工某の説ハ尋常の画工ハ彫刻下画の鐵細なり
所ハ其て其筆意と其つものあり故ハ金工ハ其
意と念ミカ表として筆意とありしものなり此高
善の下画ハ其ハ其の鐵細なり所ハ其て其細小
意と注キ筆力とありしものなり地人の及りし所
なり又本彫乃ハ象牙の丸形筆の下画と描く

とつ—中島の比は所又の工御を〜出入〜
上等の玩弄物と製と〜故自然重豪〜
と往まや〜真豪と〜家小振て画と學
いぬて夏雲と号を野生比和蘭池と〜和蘭池眼
鏡と〜玩物箱と〜中島方〜大
小好評と持〜眼鏡の所屬と〜
限〜ありて目先豪〜面白〜野小
於て中島の真豪〜眼鏡を重〜
号、主〜學生の一派と聞きた〜
和蘭池位〜眼鏡と〜野小真豪の眼鏡

重小大お坊いと後〜之と根本小鏡の印刷〜
て書きた〜その〜版ハ今小板存と印刷
物の行村〜得易〜肉筆の存〜
のい 云稀を云く

刺青画

刺青ハ一ハ文身又刺青割刺點青膚刺俗ハカク
之の又カク即身体ノ種ノ位置カクカク
カクカク又點面カクハ點面ハ化粧入
墨ハ墨刑カクカク共ハ刺青カクハ吳カクカク其ノ
技術ハ略カクカクカクカク事物紅原カクカク世俗皆文
身作カクカク仙岩神等像カクカク花卉文字旧云起カク
周カク王之子吳カク伯云カク史記載カク世家言吳后帝女
康カク之庶子封カク於會稽文身斷髮拔草萊而邑証此則
是茲事カク為始於帝女康之子因知文身斷髮之為吳

論其身、彫物致問為其(國語)曰く寛政以前の不
其との、昔は和泉古史、洋より小形之、猪の
混入に於て、斬首鑊の大袖と嚙へて雲中、小あ
り、或は女の斬首の文とく、
か、(天保十三年の)船書、一、
唱へ、信身へ種との位又、
或ハ、新毛、
と拍、
き者共却て、
と、
と、

是ハ、
と、
致、
不、
之、
と、
度、

行は (按、徳川氏の時屢觸書と出—利吉と禁
と—が流りの蓋分。終小全—と禁と—こ
—終のさるき天保の觸書ハ蓋—利吉全と—僅
と—頭ち—

荒木氏の話小 荒木氏係孫兼らる全親と一の宗
返つてはの全弟小九龍と利吉
引と四門柳とつふ 唯余ら少壯のころハ利吉
鹽一行と利吉とわけて出業とと—の身—
こととわすとの師とつ—淡州のチヤリ文谷中
の袋並木の形岩壁結の達磨全相高町の奴平淡
州の唐州権をコン— 次々四谷中門の兼等ハ

皆高射の石とありておの—長と—并あり谷
中の袋の青山焼々金ととの衣振と終小の因と
不—針小糸と通—たさま—いりあり細委あり
とて世評高うりき並木の形岩の面小巧とに
—自國業と—善く人物と形とたも壁結の
達磨全ハ左ありてわすと—わ—ありその名
とあり最と龍と形—小物と得—と相高町の奴
平ハ並岸島の山と祭小少年と捕—捕ひの利吉
と—て祭小出—と—一子あり僅小十四奴
平ことと捕—て利吉とわ—と—其の村苦痛小

堀へもして声とあけなむさけひしを唐くさ
柱をハ己の金月小唐州と不をつけてあそよそ
て居つて其指者なりき高村もト彫ハ彫若む
ハ達磨金糸の唐州柱をかりとて大小美美さ
まうそ利者となくその費用の食料を除き一日よ
金五分高麗紙ハ八百文を日と通ひ新きて不
らそとちそ人ふよりて彫その師の赤小筆若
てわすれとてあそ一人の利者ハ大極百日位
ゆゑこのなり利者ハ下直ハ彫物師自ら直くも
のあはと大極ハ直子として直うしむなり其

ころ下直の石ハ歌川國芳ゆゑ其の門人芳
龍芳虎なりと書画しつて葛飾北高かとも書し
てさて利者となくよハ先づ左と右針とあそ
あそとほしハ腕のなりハ腕の上二寸ありハ所
うてわすれとなくと上直のなりと腕のさ
たうとゆる者ありと下品なりとてことといや
ハ高麗紙ハ腕のなりとて彫と書法とそ
又右の腕ハ腕の方ハ上とわすれハ腕と法と
まことハ入墨の刑なりとけつとこのハあそ
こくと示そたしなり
高村入墨の刑ハ利者として
墨と信威とあり者あり

まゝにひびき取の上ニニ寸のうへうて服を
先とちまきと上糸より雪籠居に俵うらまて彫
りと筆法ととも刺きとカキのし術ハ先づ左の
小指と右の指おひひ人さし指の間ハ墨をわけ
たゝ筆と掃と掃と掃とて右のちし針とちしこ
しと筆の上ハ糸とちけて書きかゝるゝ直ハ墨と
へゝゝちて糸とひしゝハ筆ハ糸をつけし左
ておろしとちしとよいわくし針とて數十本の針
とまねたゝちてこゝろて書き墨とあゝちて
さて刺きハ忌痛きそのちて我慢つゝしそのふ

と一日ハ針数六七百と度とひしちて糸
とひしと甘い痛と強ハ糸と一針とニと度
つゝ高ハ好ちておろしハ痛と強ハ糸と一と
まねたゝちての針とて高ハ好ちて佐の具ハ藍
ハ糸とてちまき糸ハ梳揀糸と焼耐とて解きて刺
りてちまき糸ハ墨ハ古梅園とて一挺一ノ文位ハ
ちと用ひてちまき刺きとちまきとあゝちてハ先づ
身解衣服と清潔うゝ多飲多食とちまきとちまき
且禁物ちまき即ち梳揀糸のちまきと禁と
ちまきと何の理由又婦人ともつゝと禁と

ふちを婦人とすつらといふ米の毛やうい忽ちさ
むらゝのちそ毎日利きとありて後ふつなりとい
入法とすむらゝなり入法とすとい利きのあつて
軍一うらさ。故ちそ其の入法の母の痛とい実
ふち一風呂とす出つ、つ物とすなり凡そ
二十多日間ハ身動きもなかりしとまらぬ程
の痛とありてつらと衣服と着ることあつて
此より人とたのむらゝ後とす餘り引けさを
ふちとす

用後敷刻ハ寛政年間吉原京所ふかん〜様と

い〜料理店あり〜其の料理人ハ大門表次
とらふあり金身ハ吉原の大門とありてあり故
ハ洋名とすとあり又古老の伝ハ天保年間利き
は盛ハ行つて〜以西國うて利き守と傳ふと〜
こゝあり其の時種ハ良毒ありて毒毒なり利き
あり〜が中一著として貴とあり〜ハ飛取一傳
一足と傳ふ〜なりきと
一古老の伝ハ利きの圖ハ程〜ありとも大抵
武者連なりとの新川團芳の錦信本朝武者濫不
〜ハ即ち利きの標ぬのこゝとす〜のなりきと

と其の盛ふ行の止しはからと昔の國は極と
して種々新規なり考案をわて出うとて去原
の人にて腰は短刀をわてうとてそのあを横鼻禪
とよむといは信鏡口をさしたる如く移場の人
にて右の肩は義佐とよまきくわてて右の臂の上
小糸袋と彫られたるあそまの河臺の肛門と竅は
併とわてうとてあそま極まをわたりたるあそま極と
彫る法名をわきたるあそま煮桐抄と肛門の辺は
わてたあそま又山玉のなれはさ岸高の女年四
五十六人のいし其の腰は一樣の模範をわてて

とろいしとて浅草三社のふれは丁壯二十人一
列とわて一列の能とわてとろいしとて又曰く
婦人といは利きとわてとろいしとて又曰く
河角といは女あそま陸門の侍は蟹とわて路上は
て前とわてとろいしとて人よとて人よといは怒りていと
そろいしとて會とてとろいしとて下谷上野町は使
ちろいしの河口といは注輝あそま上野の言様師は
よい寺侍と通しとてその通とて人の役所とて
乙ろ全房あそまつけ強んとてとてまきまきとて
とてまきまき本居春本町辺の蕎麦店のとてまきまきとて

幼くしてはなかり一説に桜花の如きものといふ
るハ非ざる暇法の初年山田岩堂氏利吉と好く
右右の侍女とて一具の腕もしくハ肩に桜花
まゝハ桜花と牡丹と利吉とてなすも
下等社名も利吉と好くそのあり具の
利吉とてなすも最におもしろい考人足大上右官の親
あして字親やなすもいかにいふもそのふ
るあはすれハ業とてなすも能くさうきと

按に利吉ハ初回時右の一美術家として人跡裝飾
の最美術家としてのあり或ハ花井或ハ銀毛或ハ

山水人物ハ其の美術家としての其の要素とて
そのと選擇して裝飾とて作り作りその内舞ハ諸
着とて作り作り利吉の術ハ或は諸
回もこのありこれと其の技の精巧として且
美術家としての蓋し初回とてなすも一具
英國の人此の技ハ是れとて二との新とてなす
てりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
七をを新とてりてりてりてりてりてりてりてり
其の技の進歩とてりてりてりてりてりてりてり
一とてりてりてりてりてりてりてりてりてり

幸 我亦不為遊——其の手腕も利きして
たふ其の技と嘆きと其の地踏来の伸士去女
兼て我々國よ於つたの多しハ利きと云ふ
洋の一美術となり——極書して各其の國よあへる
為ふよと云ふ國利きと禁——候と云ふのハことを遠
警罪よ云ふ何の故なり、解き、解つたことなり
一説に利きハ即ち身体も傷みなり又母の遠体
と傷つてハ人の多は道ありあり也禁と
ふなりとこと高橋の従ふ極と云ふわけて云ふ
小多しきと云ふ利きハ身体も傷つてハあふ

と身体と裝飾も、すて即又母の遠節を尋ね
て美觀なり——由りなりと云ふこととて傷つて
ふとのと云ハ髪と利きと傷つてハ入浴と
ふことと云ハ傷つてハ利き何んも傷つてハ
のかりんや又一説ハ利きハ身体の健康と書と
ふそのなりと云ふ禁も、やと云ふ一醫學士の説
に余ハ多年利きの累——て書けり、云と云ふん
と云ふ今も研究しつゝ何なり、書と云ふ書なり、
無害なり、と云ふ奈見り、と云ふ能いなり、と云ふ
學士ハ利きハ云書なり、のりなり、ハ皮膚病なり

の爲とよい却て一種病態と云ふほどの効能を有
き、その効りといふをさとしその効能は如何
なる結果なりや又い、ある道程なりや、
確乎たる証明と云ふ能はさしなりと、
傳はれり、
考は、
又利吉中の某の部は、
中風病、
考は、
風小飛るといふ、
威の老翁、
あり又この老翁、

のなりや否やと同し、
いさとしと云ふて感と、
して月桂と云ふ、
錦と云ふ何の不可、
秋國の一美術、
然る、
傾斗生曰く、
つゝ、
洋諸島、
風と親しく、

雑誌所載

孝の始と云ふは古聖人の説く所なりて殊安端
細躰して向ふ體と云ふは心と云ふ所の群集
小星と踏みて生れと利と云ふ如きも云ふに不孝刑
法の違聖罪と云ふは相違なきなり殊小身遊小
故小細工と云ふは飾りたる事なり其の未
用の風俗なりて西洋婦人の群衆支那婦人の佳
足日本婦人の温達ハラの意取らるゝを折へ處
を削るなりと云ふ類と相違なくと云ふは法生
上よ於てと云ふは看過なりと云ふは其の事
若し人の身群は一妻と人工を加ふへといふ

と云ふは髪と云ふは髪と利は髪と利は髪と利は髪
田在鬘と云ふは髪と云ふは髪と利は髪と利は髪
その一なるは髪と云ふは髪と利は髪と利は髪
の垢たけり髪と云ふは髪と利は髪と利は髪
体も亦髪と云ふは髪と利は髪と利は髪
さゝ必要なり而して満身を如椽欄と云ふは
如きハ人工と云ふは髪と利は髪と利は髪
へさして其の片髪小報日ハ白ハ山極と云ふは
さの髪ハ裝飾の一種として髪と利は髪と利は髪
ふあはさる

画云々つて彫る。但し客は好まざる下馬と
持参する。肘は文身師のこまを坐す下馬に
て撰字一いつ彫る。其の順序は最初小脇郭と作
る。こまを箱彫と稱し全形のこま彫りをしてのち
着衣をこま部より墨と点し最後小着を刺し而
して動物小眼と入りと云ふものともあり
去る。一種の迷信は過さるるや

文身は國々各自の所好ありて一なりと云
亦者法と云ふあり。例とい種は浦安、横濱
、旗本、花八幡、左郎の類あり。こま彫り、花和南

吾智深し九段地史述の雪中舊圖なり。其の圖
中の人物は有名なり。文身はこまのりて花着を
こまに比類する人の好むところなり。其の他に
龍玉と稱するは極危嶋と負つる國のこま彫り不
動利劍と稱し文覺地難と云ふ。國の好まざる
倭玉なり。こまのこまをこまの業平の東下り小野小
河の雨乞ひと稱し。物と稱して保まざるは腰をこま
浪りものハ蝶蜂相合傘、賽花札かと云ふ。こま彫り而
して経射の婦人の文身と稱するものあり。鮮やかに
らひぬの演劇あり。講のお芳なり。作者の撰

好くして金主よなりともありて中よの資産後くして
て幸途やして己むとの事解くしり

けの如く金銀と書し書痛と書しし文才と書し
其の目的に果して何事ありや ことと一種の
裝飾として美観を衝くものたるを勿論あり
しといへども若くはしりて如く刑罰として懲を
務むることありしを敬らん 存るは文才と不
くこそものあり又ある悪漢の太刀を在り捕ら
らしめて斬頭場ふの如くたるも 斬手の一刃よ
切水にけやつと斬て下らん として背筋をえん

東照大権現と彫るありしを恐と入るて刀を
下りしゆりて遠く死を等と感し流罪ふありし
是しりしゆりて如きハ文才と悪事ハ活用し
るものといふて喧嘩口論のときハ尚も文才
と云して大喝一声敵とていさくをとり下り
るに屏息とてしり如きハ亦善く利用の及
と得るものなりて 而して文才の最もまじ
べきハことハ存るハ名譽と重ん 使氣と善成
と云ふありてそとて 文才ハ武士の両方の如
武士ハ名譽不聞とて 刀の多歩持ありし

——とて一乃と犠牲ふ供して恥辱を清く、如く
使者の己り我慢を——とて厭の俚理伽羅、業社
——のいと稀して昔の名とわ——ひ刀室と眼をれ
血とをきん——己より文身——い暴落をれ
勝負を決するれハ措うは信善の社名ふあきて
道義の標準を——とて依——と——も妙と輕
ん——名と重ん——生余と結——て極い——とのた
多く文身と對する、名氣地なり其のは層と弄し
て利備のあ——な——い、不都合や——と細
た——と——も美觀と——威勢と物——行と

た——り名とふ名を物と——と使氣とや——なり
り於き——の文身と又法——と毎月のものに非
き——なり

三十六見附ハ裸婦と——とて通好と洋——のハ
幕府時代の活方法なり——も折取なり——一寸ハ
杖と肩ハ扱けて裸婦ハあ——中流——白
日若裸——と横は——ハ普通の——と
扱なりともや——と——風と——ハ海
國の習風——の俗とや——と——の
——而してふれハ神龜と——つきて出——を社

たーたーの福をんのおいぶとて文書の又ゆゑ
ふありされば興ありて内福祥とていふ
と固く其の文書といふは又つて其の家の
考案して油墨して下地と其墨を貼き其の上へ
白粉と添へ刷きたるは一見其物と見せしむは
かゝるおとていふは其の類に後世の如きは
使凡と其の物の名の如きは其の類に其の文
書と其の類に其の類に其の類に其の類に
ことと要とていふ文書の類に其の類に其の類に
と江戸時代とていふは其の類に其の類に其の類に

必要のそのとなり今日おぼしきもなか日本獨
得の美術として歐洲人々も其の志をいふ
法律のことと禁するは考て其の業漸次凋落
目下東京府下とていふは其の類に其の類に
の四五名も出るといふは其の類に其の類に
師の業と禁するは明治五年の頃とていふは其の類に
清浄とていふは其の類に其の類に其の類に
とていふは其の類に其の類に其の類に
皇國の恥辱とていふは其の類に其の類に其の類に
文書とていふは其の類に其の類に其の類に

云つて為す日本、飾りと云ふと心取と、其
外國のふりも、古来のくとも日本の文身術と
書き、海國の土産ゆつて文身をなすといふ奇妙
なり、や人の美を頼らん、存す此形の芸術
あり、美甚く眼羨はす、止まらば、怪異と澄らさ
し、之鳥膚と白めし、わ、巧み人工を加へて、飾
り、何と特小文身との、世に、い、ん、や、手、帯
い、速小具、其を解きて、斯道の、奈達と、同、て、美術の
一、種、と、い、ふ、こ、と、希、望、と、い、ふ、の、た、り、

